

森を歩く 森を知る

森を育てる会はカブトムシの森で「里山に代表される二次林の自然環境を復元する」という目的で保全作業を続けています。ところで油山の二次林というのはどんな特徴のある森でしょうか？前回の勉強会では「地域の固有性（特性）を理解することが現代の里山保全のキーワードである『生物多様性』に繋がる」というお話もありました。

そこで今回の勉強会では講義と油山の森の観察で油山らしさ、二次林とは何かを知る機会としました。

〈世話役・報告 柴戸慶子〉

【日時】2004年4月24日（土） 10:00～15:00

【講師】須田隆一氏（福岡県保健環境研究所専門研究員）

【内容】講義 及び 自然観察

■ 講義

1. 二次林とは

二次林、里山、雑木林は一般的には同じものと理解してよい。福岡県内には夏緑樹（かりよくじゅ＝落葉広葉樹）二次林、アカマツ二次林、照葉樹二次林（シイ・カシ二次林）の3タイプの二次林がある。多くは3つの林の要素が混生している。二次林、里山といった言葉が示す二次的自然（森林、水田、草地 そこに住む生物を含めたまとまり）は人が利用することで形成されてきた。近年二次的自然が農林業の衰退で管理されないまま放置されその場を住みかとしてきたリンドウやキキョウといった日本人に身近な多くの生物が絶滅の危機に瀕している。

2. 二次林（里山）の保全にむけて

昔の里山管理には堆肥・薪炭利用などの目的があった。最近になって身近な自然とのふれあい、地域の景観、生物多様性の保全、といった新たなニーズが出できた。過去と社会構造の異なった現代の里山保全には3つの条件が必要である。

①科学的な知識

②保全にかかわる合意形成

③地域住民、NPO、任意団体、行政などの協働による保全の取り組み
近年の国、県の里山保全の施策もこのような流れとなっている。

今回の観察では油山二次林の地域固有性を理解し、それを回復することで油山らしい森づくりに繋げることを考える。また油山の森の中で、会で保全するクヌギ林、アカマツ林がどのような位置付けであるか考える一助になれば幸いである。

■ **自然観察報告** <コース>自然観察センター裏アカマツ林(森会活動地)→市民の森「県木の森」上のアカマツ林→カブトムシの森(森会活動地)

会活動地では作業世話役から各々管理目標、経緯、現在の管理内容の説明がありました。観察のメインである県木の森上のアカマツ林ではコバノガマズミが光が当たる枝で開花している様子、アカマツ林の中はかなり高くなったタブノキが見られ照葉樹の森へうつりゆく様子など観察しました。また森の縁では明るい環境を好むセンボンヤリやフデリンドウの花を楽しみました。



【感想】

- ・福岡と関東の里山の違いがよくわかりました。
- ・アカマツ林の中に、ブナ林に見られる落葉広葉樹が多種はっていて興味深かった。
- ・「油山らしさ」のお話が聞け改めて油山の魅力を実感しました。

■ **観察と講義のまとめ**

- ①二次林の特性⇒人に利用されたあとを示す萌芽更新が多い。
- ②油山二次林の地域固有性⇒アカマツ林にヤマボウシ、コシアブラ、タムシバ、ホオノキなど山地性の夏緑樹が生育。氷河期に分布していたブナ林の植物が人の利用で明るい環境が保たれたため残ったと考えられる。
- ③林縁の開花植物を見る⇒スミレには季節が遅かった。林縁の春開花植物がどのくらい縁から林内まではいつているかが管理の状態を見るひとつのポイントとなりうる。
- ④人にとっての心地よさ⇒カブトムシの森はクヌギの若い植林地で今後変化していく。変化をみながら甲虫の多い森、人が利用する森にむけて管理していく必要がある。

勉強会を終えて 油山の二次林に理解を深めた今回の勉強会でした。森の地域固有性を知りそれを回復する里山の保全を行うには、森を構成する特徴的な樹木の種名がわかることが必要と今更ながら感じました。ぼちぼち親しんでいきましょう。

講義の資料は「会が新会員にこれくらいは説明できるようにならなくては」と須田先生からお預かりしました。厚い御支援に深く感謝申し上げます。